

|    |                     |              |         |
|----|---------------------|--------------|---------|
| 所属 | 心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程 | 修了年度         | 2021 年度 |
| 氏名 | 青木 亜里沙              | 指導教員<br>(主査) | 小野寺 敦子  |

|      |  |
|------|--|
| 論文題目 | <b>中年期女性の調理意識に関する研究</b><br><b>—家族凝集性・夫婦関係・性役割観からの検討—</b> |
|------|--|

### 本文概要

【問題・目的】 中年期女性の特徴について、岡本（1994）は身体機能、職業、家族など様々な次元で変化の多いライフサイクル上の転換期であると述べている。厚生労働省（2018）によると、妻の平均家事時間は平日 263 分、休日 284 分なのに対し、夫の平均家事時間は平日 37 分、休日 66 分と大きな違いが見られる。その中でも「調理」は毎日行っている割合が高い。調理の中でも献立を考える・料理するなどの「調理行動」と調理が楽しい・調理が面倒などの「調理意識」に分けることができる。そこで本研究では調理意識に焦点をあてて研究を行う。本研究の目的は、中年期女性の調理意識がどのようなものであるかを検討することである。この目的を検討するために、調理意識についての群分けを行い、各群の特徴を明らかにする。仮説は以下の通りである。仮説 1：調理好き家族ほめ群は他の群に比べて、家族の凝集性が高いだろう。仮説 2：家族のために調理群は他の群に比べて、伝統的性役割観が高いだろう。仮説 3：淡々調理群は他の群に比べて、妻が評価する夫の調理行動が低いだろう。仮説 4：調理嫌い家族ほめなし群は他の群に比べて、夫に対しての親密性が低いだろう。

【方法】 調査対象者：夫・子ども（中学生から大学生）と同居している 40 代・50 代の既婚女性 400 名に Web 調査を実施した。調査内容：①中年期女性の調理意識尺度（独自作成）26 項目 4 件法。②妻が評価する夫の調理行動尺度（独自作成）10 項目 4 件法。③家族の凝集性尺度（茂木，1996）10 項目 4 件法。④夫婦関係尺度（小野寺，2005）14 項目 4 件法。⑤性役割観尺度（鈴木，1994）7 項目 4 件法。  
フェイスシート

【結果・考察】 K-means 法によるクラスター分析の結果、調理好き家族ほめ群、家族のために調理群、淡々調理群、調理嫌い家族ほめなし群の 4 つのクラスターが得られた。次に、4 つのクラスターを独立変数、家族凝集性を従属変数とした 1 要因の分散分析を行った。その結果、淡々調理群と調理嫌い家族ほめなし群よりは、家族の凝集性が高かったが、家族のために調理群とは、差が見られなかった。よって仮説 1 は部分的に支持された。仮説 2 の検証を行うために、独立変数は仮説 1 と同様にし、従属変数を伝統的性役割観とした 1 要因の分散分析を行った。仮説 2 は実証されなかった。性役割観が代代的に高かったことが実証できなかった要因として考えられる。仮説 3 の検証を行うために、独立変数は仮説 1 と同様にし、従属変数を妻が評価する夫の調理行動とした 1 要因の分散分析を行った。その結果、「調理好き家族ほめ群」よりは低かったが、「家族のために調理群」と「調理嫌い家族ほめなし群」との間には差は見られなかったため、仮説は部分的に支持された。厚生労働省（2018）の調査では、30 歳以下の男性の方が調理を行っていると明らかにしているため、中年期女性の夫は若い世代の夫よりも調理に関わらないことが考えられる。最後に仮説 4 の検証を行うために、独立変数は仮説 1 と同様にし、従属変数を親密性とした 1 要因の分散分析を行った。その結果、「調理好き家族ほめ群」「家族のために調理群」より親密性は低かったが、「淡々調理群」との間には差は見られなかった。よって、仮説は部分的に支持された。「淡々調理群」との差が見られなかった理由として、肯定的・否定的な調理意識よりも家族からの賞賛がないことが考えられる。「調理嫌い家族ほめなし群」「淡々調理群」とともに家族からの賞賛は他の 2 つの群よりも低かったことから、夫や子どもから「おいしい」や「作ってくれてありがとう」などの賞賛や労いの言葉が親密性と関連があることが示唆された。

